

中国東北部を旅して

成田 宣子



一．はじめに

二〇〇七年八月六日から八月一二日にかけて、中国東北部（旧満州）を旅した。うまれて初めての海外旅行であり、初めての中国である。ツアーは観光旅行ではなく、『中国残留孤児の足跡をたどる旅』だったが、わたしにとつては違った意味あいの旅でもあった。これまで幾度か誘われていた中国だったが、なかなか一歩を踏み出せないでいた。やっと決断したのは、わたしが北朝鮮で生まれたという事実と戦後すでに六二年がすぎてしまっているということである。関東軍の軍人だった父がいた旧満州。母が引き揚げる時四人の子を連れて乗車した新京駅（現長春）。想像でしかなかった中国を、現地に立つてこの眼で確かめてみたい。今行かねばいっつ行ける。そんな気持ちで参加した一週間の旅だった。わたしなりに感じた中国をレポートしてみた。

その前にまずわたしの戦争体験から語ってみたいと思う。終戦時まだ胎内にいたわたしにと

つては、まさに胎内引揚げ体験であるけれど、父や母、姉の残してくれた手紙や資料をもとにわたしなりの戦争体験として記してみようと思う。

二．わたしの戦争体験

―北朝鮮から引き揚げ―

わたしの父は一九〇九年（明治四二年）、山口県の吉敷郡（今は合併されて山口市）の農家の三男坊に生まれた。あの時代三男坊といえば、兵隊さんになるくらいしかなかったと父が言っていたように、旧制中学を出てから教練検定（一九歳）などの試験を受け、やがて特別志願士官として、（旧）満州に渡った。一九三八年には、ハイラルの第八国境守備隊第一地区隊に赴任し、中国東北部の戦闘やノモンハン事件（一九三九年）などにも参戦していた。結婚した母も渡満し、子どもも生まれていた。

終戦の前の年、一九四四年七月からは、吉林省にある新京（現・長春）の第三十六飛行場長

としての任務に着いた。一九四五年（昭和二〇年）春頃から戦局は相当厳しさを増し、防空壕をほったりしていたそうだが、八月九日、ソ連が旧満州にいつせいに侵攻してきてからは、新京市街も大混乱したという。とうとう軍上層部から「家族は足手まといになるから、早く疎開させよ」と指令が出たが、母たちは「みな主人と運命をともにします」といつて疎開しようとしな。頑固な母のことゆえ、父は仕方ないかとあきらめていたら、一〇日になって再度指令があり、とうとう母たちは泣く泣く疎開することを決意したという。八月一日朝、母はもてるだけの荷物を持ち、長女（八歳）、次女（五歳）、長男（三歳）、次男（二歳）、そしておなかの中には八か月の子（私）を抱えて新京駅に集合した。父は役目上新京に残り、母は一人で四人の子を抱え、身重の体で列車に乗り込んだ。当日新京駅は引き揚げようと集まった大勢の人の群れで大混雑を極めていたが、男達はみな根こそぎ動員されていたときで、幾列も幾列も列が続いている大部分は女性と子どもたちだったという。



母達の乗った貨物列車は南下し、北朝鮮の宣川まで行ったところとまり、もうそれ以上に進まないというので、おろされた。何十家族の人たちで、宣川の町にとどまる

ことになり、終戦もそこで迎えた。当時宣川の町には日本人の人たちも住んでいたが、引揚者の母達の一団はお寺、学校や公民館のようなところでみんな雑魚寝状態である。配給の生活なので、栄養状態も衛生状態も最悪で、特に子どものいる家庭は大変だった。大豆とお米がちよろつと入ったおかゆさんばかりで、おなががすいてやり切れない。子ども達はあまりのひもじさにお豆を拾うて食べたりしておなかを壊し衰弱していき、亡くなる子も多かった。我が家もその例外ではなく、とうとう一〇月五日に二才の次男が、六日には五歳の次女が二日続けてなくなつた。栄養失調だった。

母は悲しみにくれないながらも、町でりんごの箱を買ってきておさめ、みんなで山の中へ埋めに

いった。二人続けてなくなつて二週間後の一〇月一九日に私は生まれた。お寺の花輪の置いてある物置の隅で生まれたという。宣川で生まれたので、一字とつて宣子と名づけられた。同じころ同じ場所、七、八人の赤ちゃんが生まれたが、ほとんどみな栄養失調で次々と亡くなり、生き残つたのは私だけだったと、戦後母がしみじみいつていた。

私が生まれたものの、母はほとんど食事らしい食事もないのでおっぱいもでない。仕方なく、水道の蛇口に口をつけてお水をガブガブ飲んで薄いおっぱいを出していた。私は泣き声もろくに出来ないやせた赤ちゃんで、「骨皮すじえもん」のようだったという。こんなことではみんなが飢え死にするからと、そのうち働きに出られる人は出ようということになった。独身の人は、日帰りの女中仕事（朝鮮の人の家）で食事は向こうもち。そのぶん、配給食を我が家のような子どもの多い家族に分けてくれたという。子どものいる人は石鹸やタボを安く仕入れて売りに出たり、不要の布切れをもらつて小物を作つたり。時々青ねぎ一本、にんじん半本、生味噌を少しの配給があつたりした。服も新京を出る時、来ていたもんぺの上下が着替えもなくて寝てもさめてもその着物だから、ひざは擦り切れるし、外の方もポロポロになつたのでみんなから古いのをもらつて着ていた。

八月一五日からはロシアの兵隊が入つてきて

住み着いたので、治安も悪化。寝ているところへ音がすると、「ロスケがくるよ」といつてみんな声を潜めてじつとしていた。「女出せ」「時計出せ」と脅すので、女性は髪を丸坊主にし、顔を炭で汚く塗つて、汚い服を着て、風呂敷で頬かむりをして男か女か分からない格好をしていた。私が生まれた時も、母はハサミで髪を切り、スミで顔を汚していた。本当に怖かつたといつていた。母は隊長さんの奥さんだつたといつてもあつて、引き揚げ団の団長さんのような係りをしていて、いつも忙しそうに走り回つていた。

翌年、いつまでたつても日本に帰してもらえないので、みんな交渉して、とうとう、「動いてもいい」という許可が下り、みんな帰ることになった。宣川について一年ぶりのことだつた。梅雨の頃に出発することになったが、そこから、本当に悲惨な逃避行の日々だつたという。出発する時のことを、当時八歳だつた姉が後年回想している。

「いよいよ内地に向けて出発できる時がきました。出発直前に弟や妹のお墓を掘つて、焼いてお骨を木の箱に納めました。死の直後より悲しみが深くなっていました。生きているうちにもつとやさしくしとけばよかつた。夜中に起こしてきた時、やさしくついていってやればよかつた、懺悔の涙を流した後、空を見上げました。丸い山々が青く、やさしく目に映りました。

後から悔やんでも取り返しのかかぬことがあることを、弟、妹の骨がいやというほど教えてくれました。」

母は再びもてるだけの荷物を背負い、片手に荷物、片手に三歳の長男の手を引き、八か月の私は八歳の姉の背にくくりつけられ出発した。一行約一万人の行列(姉の言葉によれば、)が、三八度線を突破し、南鮮に出るまで歩きつづけるのだ。毎日毎日、ひたすら山の尾根を、雨がしとしと降る中歩きつづけ、いくつもの山々を越した。山の途中には監視所があつて、「時計を出せ」、「お金を出せ」とせびられたそうで、「出さなきゃここを通さないぞ」といわれ、仕方なくお金持ちの人が払つて通れたとか。毎日雨ばかりで、もつて出た食料も菓子もリュックの中でぬれて、膨れてブヨブヨだったとか。大雨の降ったとき、川には水があふれ、みんなで必死にわたったという話、その時おぼれてなくなつた人がいたとか、戦後母から聞かされた。

びしょぬれの中、三歳の兄は母に手をつながれて必死に歩き、履物も擦り切れてなく、それでも駄々をこねていると置いてきぼりにされてしまうので、はだしで大人の速さについて必死に歩いた。休んだ後さあ出発という時に兄が行方不明になったことがあり、母は気も狂わんばかりに必死で探し回ったそうだが、行列の端から端まで探してようやく見つかったという。

八歳の姉は私をずっと背負つて歩いてくれた。

その時のことを次のように書いている。「梅雨でみんな濡れ、妹も背中であぐらをかきました。背中の妹は骨と皮ばかりにやせていましたが、生きていました。その強靱な生命力にみなが驚きの目を見張りました。身の安全を考え、夜間行進が主でした。私が眠り込んで行列に遅れば、妹とともに命はなくなりません。『何をぐずぐずしている。泣いたらおいていかれるぞ』と怒鳴られて必死に歩きました。生きて内地に帰り着きたい一念で、眠りながらも足は前に進んでいました。背中の妹が気になり、死の恐怖と隣り合わせで命のいとおしさに骨のずいまで浸されながら歩きつづけました。」

こうして言葉に言い表せない苦労の末に、家族は裸同然の姿で福岡の博多港にたどり着いた。母はみんなの命がかかっているからと、一時も気を許すことがなく、日本にたどり着くころには身も心もボロボロになっていた。二人の子を亡くしていたので、宣子だけはどんなことがあ



n.n

つても守り抜くぞという気迫に満ちていたという。家族のこうした実情も知らないまま、父は四五年一月ごろシベリアに抑留され、苦勞して、二年後に帰国した。やがて弟も生まれて、家族六人の長屋生活が始まった。

戦後ずっと引き揚げの苦勞話を聞かされて育つた。蓄音機で軍歌を聞くことの好きな少女だったが、やがて実は「被害の前に、長い加害の歴史があつた」ことを知った。

つい最近知ったことだが、母たちが新京駅を出発した八月一日は、満鉄社員や軍人、その家族が優先され、その日避難しようと集まった大勢の人達は乗せられないままに汽車は出発したと聞いた。「せめて子どもだけでも乗せてください」という多くの人たちをなさけ容赦なく無視して列車は発車していったということだった。今更ながらに本当に申し訳ない思いでいっぱいである。

そんなこともあつてか、わたしの中で中国は『一番近くて、遠い国』として心にあつた。オリンピックのせいでも、中国はどこに行つても工事だらけだったが、高いビル街と今にも崩れそうなレンガ造りの家々に、格段の貧富の差を感じた。それでも、人々はみな元気がよく、人懐っこくて優しさに溢れている。まさに大地そのもののたくましさを感じた。こんな国になぜ日本は侵略したのだろうか。



大連・人民広場からみる超高層ビル群

写真撮影は禁じられていた。「気をつけてください。いよもし見つかったら、免許取り上げられますから」と運転手さん。旅順の郊外にある『水師営会見所』は、一九〇五年一月五日、乃木希典將軍とロシアのステッセル將軍が会見した場所である。廃屋のようだったという建物は古い写真をもとに正確に復元されていた。高粱の幹でつくった屋根

三 はじめての中国訪問

— 今に残る戦争の傷跡 —

〈大連〉 八月六日、岡山から韓国の仁川（インチョン）空港を経由して大連に飛ぶ。空路二時間は結構近い。日本との時差は一時間。気温二八度。空港で換金、一元一六円だった。最初にバスで向かった先は日露戦争最大の激戦地だった旅順。大連市管轄の行政区の一つで「旅順口区」となっている。大連市街から南西に五〇キロ。旅順は軍港の街ということもあって、つい何年か前までは外国人立ち入り禁止区域だったそう。今は開放されたが、バスの中からの

と泥壁の屋内には、戦後野戦病院だった頃の手術台に使ったというテーブルがそのまま土間に置かれていた。ここで乃木は鷄五〇羽、ぶどう酒三〇本を贈り、ステッセルからはアラブ産の白馬を贈られたという。

次にりんご畑が広がる道を走って、『二〇三高地』へ。日露戦争時、日本とロシアがこの旅順港を見下ろす小高い山を取り合い、日本兵約一万九千人、ロシア兵約七千人がなくなるといわれる。山の頂上には今も当時の塹壕の跡がそっくり残されていた。日本軍の手で立てられた慰霊碑は銃弾の形をしており「爾霊山」（二〇三）の文字が刻まれている。日露戦争は中国人々にとって、『自分の家に土足で踏み込んだきた大日本帝国と帝政ロシアという外国の軍隊が戦うのを、苦々しい顔で見ただけの事件ではなかった』『戦争に巻き込まれた人的、物的被害のほかに、主権を侵された屈辱の歴史が長く尾を引いた。旅順戦跡はそのことを教訓とする愛国教育実践の場となっている』のであった。（毎日新聞二〇〇七・九・九）

今回始めて知ったことがある。旅順港包囲軍の中に、あの有名な与謝野晶子の弟がいて、彼女はこの弟を思って、日本で「君死にたまふことなかれ」という詩を読んだという。

『ああ、をとうとよ、君を泣く、君死にたまふことなかれ、末に生れし君なれば、親のなさはまさりしも、親は刃をにぎらせて人を殺せ

とをしえしや、人を殺して死ぬよとて、二十四までをそだてしや……』

大連の市街地に戻る。アカシアで有名な大連は人口四五〇万人の急成長の街で、どこに行っても真新しい建物が林立していた。が、オリンピックのせいかな街中が建築ブームでいたるところ道路の掘り起こしをしていた。今にも崩れそうな赤レンガ造りの家もあちこちに残り、格差社会をものに感じさせる。日清戦争後、ロシアの手によりパリをモデルに作られた巨大商業都市（ダルニー）として発展した。異国情緒溢れる町並みは、今もそのままに当時の建物が残る。日露戦争後は日本の手により大連となり、今は中国に戻っている。街には日本人街、ロシア人街が残る。日本統治になってからの旧満鉄本社（南満州鉄道株式会社）や満鉄病院はレンガ造りの重厚な建物で当時をしのばせる。満鉄は大連から長春まで、総計一万キロの鉄道で、日露戦争後の一九〇六年南満州鉄道株式会社として誕生した。初代総裁は後藤新平。翌一九〇七年には満鉄本社を東京から大連に移した。満鉄は最初から中国侵略のための国策会社で、多くの日本人が何も知らされないまま、この鉄道によって中国内部・奥地へと運ばれていったという。

当時満鉄経営のホテル（ヤマトホテル）は各地に作られ、病院も主要一五都市に建設され、今も各地に残っていた。当時満州への玄関とい

われた大連港は今も中国で三番目に大きな港で、四つの埠頭がある。市街地を走ると道路沿いにりんご・すいかなどの果物や野菜の露店が多く見られた。都市部を除いてほとんど信号もなく、車線・標識もないので歩く人も運転手さんも命がけ。二〇〇二年から走り出したという路面電車はどこまで行っても一元で運転手は女性ばかり。さすが中国だ。

〈牡丹江〉 八月七日、大連から飛行機で黒龍江省の牡丹江へと飛んだ。国境地帯に近いというところもあつてか、機内にはロシア人の家族連れが大勢乗っていた。「ジャパニーズ」というと、即座に「エビ、ちらし寿司」と笑って答えてくれた。即席の日ソ友好！

人口八一万の牡丹江はチチハル、ジャムス、ハルピンについて大きい町。その八割近くが山岳部で、原生林による林業、高麗人参やキクラゲの採取、石炭や大理石、石灰石などの工業も行われているという。「旧満州、中国東北地方のさらに北方で立ち遅れています」とガイドさん。北海道に似た光景の中をひたすら隋道河子に向かつて走る。大豆、とうもろこし、ひまわり、葉タバコの大地が延々と続く。このあたりは一月から雪が降り、冬はマイナス三八度にもなるという。ところどころに集落が見える。ヤギの放牧。牛車。馬車。ロバ車。途中から舗装なし。ある集落へ入っていく。一九四五年八月九日、

ソ連参戦後、開拓民の人たちが逃避行した場所である。その逃避行で多くの人が亡くなったという。「あの山の向こうから逃げてきました。昼は危ないので真つ暗な中を必死で逃げた。開拓団の二五人がここで亡くなりました」と残留孤児の高見英夫さん。このあたりの牡丹江を渡る時、荷物をすべて失ったという。みんなで線香と花束で慰霊した。

八月八日、龍爪開拓団だった集落を訪ねる。集落の入り口には今も竜、爪という二文字が刻まれた石柱が二本立っている。この石柱の門からポプラ並木を行くと、今日はバザールがあるらしく大勢の人で賑わっていた。小林軍治さんや織田エミ子さん、高見英夫さんがおられた開拓団である。龍爪開拓団には二五四人が入植、岡山県からは二二九人。うち帰還者五七五人。死亡者六三七人。未引揚げ六五人。根こそぎ動員は終戦時、軍に見放されて逃げまどう開拓農民二五万人の筆舌に尽くしがたい苦難の運命に拍車をかけることになった。根こそぎ動員は国策会社の技術者は除かれたという。

龍報希望小学校との交流。黒龍江日報という新聞社から三二万円もの資金援助があつたそう。二年前より設備改築がなされていた。英語やパソコンなどの教育も徹底しており、遠い生徒のために寄宿舎も用意されていた。若い校長先生と友好を確認しあい、サッカーボールやバスケットボール、バトミントンを寄贈した。用

意されたスイカやバナナ、桃が美味しかった。この日は休日のため、子ども達には会えなかったが、子ども達の習字や絵画を見せていただいた。この日、今回の中国旅行で唯一、板張りに四角い穴のあいただけのトイレにお目にかかった。

〈長春〉 牡丹江から夜行列車に乗って一路長春（現奉天）へ。着いた日は、ちょうどソ連が参戦した八月九日。長春は旧満州国の建国と同時



時に首都になった。広大な荒野に近代都市の建設がはじまり、高層建築が層々楼々のように建設されていったという。お城の形の関東軍司令部は今も残り、現中国共産党吉林委員会として使用されているという。

「ここには当時多くの日本人が住んでいた。第二のふるさとという人も多いだろう。一度来てみたいと思つても、もう年取つてこれない人も多いだろう」とガイドさん。

長春は春が短い。長い春が来て欲しいという願いから、長春と名づけられたという。「長春飛行場跡がすぐ近くにあるらしいので、行ってあげますよ」と青木康嘉先生。「成田さんのお父さんは飛行場の一番の責任者でした」との紹介に

も胸が詰まって言葉が出ない。今は軍の施設になつているので、中には入れず、門のところまで写真をとってもらった。いかめしくそびえたつコンクリート製の門はうっそうとした木々に囲まれて、シーンと静まり返つていた。どんな思いで終戦を迎えたのだろうかと、しばし父を思った。父は戦後飛行場にやつてきたソ連軍使との交渉にあたり、やがてシベリアに抑留された。父は抑留された二年間の記録を生前書き残していた。父の一三回忌に『わが父 上山重介』として出版した。



父がいた長春飛行場（現在、軍の施設）

コメさんは、約三か月にもわたる逃避行で精神的にも肉体的にも弱りきつていた。自分の食べるのを我慢して、僅かな食糧も子ども達に優先した。それでも三人もの愛する我が子を失ったお母さんは、昭和二〇年一月初旬にこの公園で亡くなったという。その後残留孤児となった高見さんは五五歳で帰国した「日本人として人

間らしく生きたい」と願つて残留孤児裁判に加わつた。

〔瀋陽〕 人口七二〇万人で上海、北京、天津について中国第四番目の大都市、重工業都市である。四、五年前までは四〇〇万台の自動車で溢れていたが、今は自動車も増え、整備されて、大分渋滞も緩和されてきたという。ところどころに「力工」と書いたプラカードを首からぶら下げている男達が立っていた。聞くと、仕事くださいということだった。不景気の中国では、リストラされて仕事のない男達がこのように仕事を求めて、街角に立つ姿がみられるのだ。文化大革命の時代に、勉強する機会を失つて、技術も身につけていない男性が、今ちょうど四、五〇代。昔は三人の仕事を五人でしていたが、コンピュータの発達で、今は三人の仕事を一人でできる時代になり、それだけ人が選ばれる。一三億人の中国では仕事を探すのも大変なんだあと思つた。

『九・一八記念館』を訪れた。一九三二年九月一八日に起こつた柳条湖事件を記念してつくられた記念館である。中国東北地方全域の支配を狙つた日本軍は、瀋陽市郊外の柳条湖で南満州鉄道を爆破。これを中国軍の仕業だとして中国東北地域全域へ一斉攻撃を開始した。一九三二年二月までには東北の主要都市のほとんどを占領。同三月には満州国（日本があやつる傀儡

国家）を作り世界中からの非難の中で、一九三三年三月国際連盟脱退。こうして日本は一九三七年七月七日の盧溝橋事件をきっかけに中国全域へと侵略戦争を始めた。記念館の前には、日本軍の作つた勝利碑が、今は罪の証拠として横倒しにされていた。館に入つて最初の部屋は薄暗く、四方を長白山に囲まれたようにイメージしてあつた。さらに進むと侵略時代に日本軍が犯したあらゆる蛮行が、これでもかこれでもかとパネルやロウ人形で再現されていた。南京大虐殺、重慶への無差別攻撃、七三一部隊などで、日本軍が行つた『殺しつくし、奪いつくし、焼きつくす』惨状。見るに耐えないものがあつた。館内で買つた本の題名は『勿忘九・一八』。まさに今の日本に対するメッセージであつた。決して忘れてはなるまい。

木々の生い茂つた道を抜けると撫順で有名な露天掘り炭鉱へ。ショベルカーで今も一日七千トン石炭を掘り出している。無煙炭として有名だそうだ。とにかく広い。端から端まで六、六キロ。幅一、二キロ。面積は一三、二平方km。この撫順炭鉱の近くにある平頂山村には、かつて三千人の村人が住んでいたが、一九三二年九月一六日、日本軍により、住民皆殺しの虐殺がなされたという。そのときの遺骨をそのままに困つた記念館が作られた。平頂山記念館である。今回はリニューアル中ということで入れなかつたが、その遺骨の一部が九、一八記念館に移さ



「九・一八記念館」に展示された平頂山事件の遺骨

れていた。バスの中でガイドさんの言葉が印象に残った。

「過去の歴史、真実の歴史は決して忘れてはいけない。中国も日本も被害者だった。六月に長崎の資料館に行った時、驚きました。破壊された街を見てすごいと思った。やはり平和は何よりです。戦争は絶対だめです。しみじみ感じました。世界の平和友好をやらなければならぬ。これから二一世紀に向けて日本国民と中国国民ともに頑張ろう。」

四・「憲法九条」の原点は

中国にあった

今回の旅で一番心に残ったのは、九・一八記念館の館内に掲げてあった最後のあいさつ文である。日本語と英語で訳されていた。

「日本帝国主義はなぜ敢えてわが中華に向かって刃を振り上げたのか。ここに展示されている写真はことごとく確固とした事実であるのに、なぜ今日に至ってもそれを正視できず、はなはだしきに至ってはそれを歪曲し、改ざんしている者がいるのか……」

十五年戦争の真実であり、まさに今の日本に突きつけられた文言である。二千万人ものアジアの人たちの命が奪われたあの十五年戦争の、侵略の先頭にあつた関東軍、その軍人を父に持つ娘の一人として、今回は非中国の大地に立つて叫びたかった。「本当に申し訳ありませんでした」と。そして二度と戦争をしないと誓ってうまれた憲法九条をなんとしても守り抜くことが、過去を未来に生かす道だと思いつつ。「九条を守るために私は一歩も引かない。一ミリも引かない」といった澤地久江さんの言葉そのものである。

現地に立って初めてみえてきた過去・現在。そしてみえてきた未来がある。

(なりた のりこ)

日本国憲法「第二章 戦争の放棄」

「第九条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇または武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」